

	キャンプ運営の課題	解決策
北海道	サマーキャンプ運営におけるヤングスタッフの育成、北海道つぼみの会事務局の増員、寄付金の不足	・サマーキャンプ運営におけるヤングスタッフの育成→ヤングの自主性の尊重、中学生の企画運営への参加促進 ☒☒北海道つぼみの会事務局の増員→大人たちの交流会での勧誘 ☒☒付金の不足→参加者の会費の値上げ
青森	3日間連日の雨だったので、雨天時におけるプログラムの遂行	雨天時用の代替プログラムの準備はしていたが、実際に雨天時用の代替プログラムを実施することになり、臨機応変に対応しプログラムを遂行することができた。今後の雨天時の参考になった
岩手	①費用の捻出 ②参加スタッフの確保	①医療物品の見直しをして経費を抑えた。 ②学生のボランティアスタッフの参加 ③岩手医科大学附属病院からのスタッフ応援(若手医師、看護師)
秋田	日帰りのためスケジュールがタイトとなった	プログラム内容を当日に調整し、スムーズに進行するようにスタッフ同士で協力しあった。
山形	キャンパーの確保	キャンプに参加するかはキャンパーの意思と保護者の意思が大事なため、キャンパー向けのカリキュラムと保護者向けのカリキュラムを準備した。
福島	小学生から中学生までみんなが楽しめるイベントをつくること。	イベント内容を療法士さんに依頼した。 班編成では、班ごとの性別や年齢に差がですぎないように心がけた。
群馬	・同年齢の患児同士の交流、親睦 ・インスリンポンプ(オートモード)の順応	・参加患児の班編成を縦割りではなく、同年齢にしたこと ・インスリンポンプ使用(主にオートモード)による各患児の血糖値変動に合わせてのトラブル対応を日中夜間問わず医療者に行っていただいたこと
茨城	コロナ禍により5年ぶりの2泊3日のキャンプであり、初参加のキャンパーも多く、且つ初めての施設での開催(以前使用していた施設が閉所された)となったため、事故無く健康障害等無くキャンプを開催することを最重要課題として挙げた。	キャンプ開催前より施設との連絡を深め、施設の詳細な内容や規範を我々が十分に把握するとともに、施設側にも我々の行う行事内容を理解していただき、その施行にあたっての安全確保等に関するアドバイス等を頂いた。 また、キャンパー本人の医療情報を事前に詳細に収集し、ボランティアスタッフが十分にその情報を把握してからキャンプに望むように図った。
東京(つぼみ)	外気温が非常に高く、屋外活動を安全に行うための熱中症対策が最大の課題であった。また、宿泊施設の人数制限の関係で、十分な人数のスタッフが宿泊できず、参加者の医療サポート体制を保つことも重要な課題であった。	屋外の活動を朝夕の涼しい時間帯に設定し、十分な水分補助急を徹底した。スタッフの一部を日帰りや近隣のホテルに泊まるなどしてもらい、対応した。
東京(なかよし)	・自然災害に対する対応 8月8日に宮崎沖日向灘地震が発生し、キャンプ期間が、南海トラフ地震臨時情報が発令期間中であった。キャンプ開催地が南海トラフ地震防災対策推進地域に該当していたため(南海トラフ地震津波避難対策特別強化地域には該当せず)キャンプ直前に参加をキャンセルする方が数名いた。 また、台風7号がキャンプ開催地である千葉県にキャンプ期間に直撃する予報であった。	・地震に対しての対応についてキャンプ直前にメールにて各キャンパーに通知を繰り返し行った。 ・通常開催時は保護者との連絡は緊急時以外はとっていなかったが、台風の予想に対しての対応について随時対応について情報を通知した。 ・キャンプ終了予定を台風直撃予報時間よりも早い時間で切り上げて終了とした。
東京(わかまつ)	①働き方改革等の社会的な変革により、大学病院の医療スタッフが業務あるいはボランティアとしてキャンプに関わる事が難しくなった。 ②2024/8/9に宮崎県沖で発生した地震により南海トラフ地震注意報が発令されたことで、キャンプ直前に実施そのものについて検討する必要がある	①キャンプの運営に関わる多様な業務を見直すとともに、元来特定の医療スタッフが担っていた業務を積極的に全体で分担し、持続可能な運営形態への移行を進めた。 ②南海トラフ地震注意報発令中にキャンプ実施が可能かどうかをスタッフ間で慎重に検討し、直前での参加キャンセルを保護者に考慮してもらい、災害時の対応を予め確認する(災害時物品や避難ルートの確認、緊急連絡網の共有など)など、キャンパーの安全に最大限配慮した。
千葉	・統制をとる中高生の参加がなく、また参加患児に年少者が多いため統制がとりにくい。	・こどもたちにわかるよう平易な言葉でルール説明等を行った。 ・学生ボランティアに、どのような子どもが参加しているのか、どのような協力が必要なのか具体的に説明し、協力を得た。
埼玉	①埼玉には100人以上を収容できる施設がわずかしかなかったため、宿泊施設の確保に時間を要した。また、開催日程の変更により、学生のボランティアスタッフの確保が課題となった。 ②昨年度、キャンパーが定員割れをしていたため、今年度は参加者を広く募る工夫が必要だった。 ③コロナの期間に遠のいた企業からの寄付金や広告は、毎年アプローチはしているが、現状回復することが出来ていない。	①希望宿泊施設が落選してしまい、急遽、別施設への切り替えを行った。過去に一度利用した施設ではあったが、馴染みのない施設のため、企画自体に変更を加えていく必要があった。下見を丁寧に行い、新しい施設でも取り組むことができる活動を相談し決めていった。また、当初の日程から外れてしまったため、予定していた学生ボランティアスタッフの全日程の参加が厳しくなり、県内の他の大学・短大への依頼を行った。 ②コロナで下火になってしまった宿泊行事に対する考え方を回復させるために、今年度は会報と同時にサマーキャンプのチラシを配付した。つぼみの会の会員が集まる行事の中で、サマーキャンプ説明会を実施したり、過去のサマーキャンプで使用した学習物や冊子、医療情報にかかわる提出物などを閲覧できる機会を設定したりし、サマーキャンプについて少しでも知ってもらいための場を設定した。結果的に、説明会参加者は全員申し込みを行ってくれ、不安や心配を払拭する良い機会となった。 ③企業からの寄付が減少したことに加え、物価の上昇に伴い宿泊費や食費の値上げがあることから、現実的にキャンパーの参加費の値上げをするしかなかった。しかし、それだけでは、まかなうことは難しく、スタッフの参加費についても値上げさせてもらうこととなった。
神奈川(横浜)	インスリンポンプの使用者、とくにHCLを使用している子が増えたため、夜中のアラームや低血糖対応が頻回となりスタッフの疲労がたまったこと	今回のキャンプ中での解決方法は見出せませんでした。次回キャンプに向けて対応を検討したいと思います。

山梨	新型コロナ流行中に、県の方針で県営の宿泊研修施設が3カ所閉鎖となりました。その為、安価に宿泊できる施設が無くなってしまったことが大きな問題となっていました。幸い、難病のこども支援全国ネットワークが運営する「あおぞら共和国」が県内にあり、何とか運営することが可能となりました。ただし、今までの施設とは違い宿泊人数に制限があったり、食事の提供がなく弁当の外注になったりと使い勝手が分からず、苦勞致しました。 県営の施設にはあった体育館が無くなってしまったことで、雨天や屋内の企画の開催に際し、工夫が必要でしたが、幸い市営の体育館が隣接していたため利用させていただくことが可能でした。 しかし、寄付や賛助をいただいている状況でも例年通り、資金面でのやりくりには苦勞しています。	食事の提供に関しては、自炊できる部分は自炊をし、栄養スタッフの負担にならないよう外注で賄うようにしました 体育館に関しては、あおぞら共和国に隣接する白州体育館を利用させていただきました。白州市長や白州体育館館長のご厚意で、キャンプ中は小体育館を無償で借りいたしました。 多数の地元企業に協賛のお声がけさせていただき、一社より食品の現物支給での協賛を得ることが出来ました。 資金面に関しては、山梨県在住の開業医の先生方からの篤志により寄付を頂戴し、運営費に充てることが出来ました。
長野	新型コロナ感染症により、開催できなかったため、宿泊キャンプではなく日帰りキャンプを行った。キャンプに参加したことのない患者、家族の参加がほとんどであり、家族参加も多く、限られた施設内でのプログラムの実施、展開方法に工夫が必要だった。 ・スタッフ参加が多かったが、打合せに参加していないスタッフの参加が多く、当日のプログラムないでの役割を遂行していただくことに配慮が必要だった。 ・初参加者が多く、糖尿病の療養行動についての理解度の把握が難しかった。	・幼児の患児やグループワークの話し合いに参加できない年少の兄弟の対応が必要であった。そのため、遊び道具を準備し、学生ボランティアや看護職、小児科の医師にその場で遊べるものを使って対応していただいた。途中で変える家族もなく、予定時間までいることができた。 ・糖尿病の理解度については理解度確認を行った。
新潟	開催日数:「働き方改革」の影響でスタッフが長期に渡り参加しづらい状況であった。	開催日数の調整:2泊3日とした。
静岡	・参加者の確保。(コロナ禍以降、宿泊を伴うサマーキャンプは2回目でしたが、なかなかコロナ禍以前の参加者に戻っていません。)	・広報活動の充実(さかえや日本糖尿病学会からの情報でキャンプを知った方が多いので、来年度も協力を依頼したいと考えています。)
浜松	・年少者の参加を募ったことで、過去最多の参加者数となり、スタッフの人手が足りず、低血糖の発見が遅れる可能性があった。 ・コロナウィルス感染対策にも配慮する必要があった。	・参加者数に対してボランティアスタッフが足りなかったため、保護者にもご協力を頂いた。 ・低血糖患者の発見を容易にするため、CGMを使用していなかった方には導入して頂いた。 ・感染対策に注意したため、クラスターの発生はなかった。子供同士は無邪気に交流していたので、手洗いなどをこまめに行った。
東海地区	スタッフとして参加するボランティアの確保	キャンプ運営団体から各病院への派遣依頼書の提出
石川	能登半島地震による開催場所の検討	能登半島地震により例年開催していた施設で実施することができなくなった。開催できないことが判明した時点で、新たな開催場所を探した。新たな開催場所の申し込みはメールとなっていたが、まずは電話にて本キャンプの趣旨等を説明し、理解を得られるよう努めた。また、安全に開催できるよう、現地を直接確認し施設の方と打ち合わせを実施、さらにキャンプ開催までメールや電話でのやり取りを重ねた。
富山	膨大な事務作業量、事前準備(他の施設では引継ぎは不可能なレベル)キャンプの存続が危ぶまれる	業務補助のために一開業医が人件費まで負担している(事務員を雇用している)
京都・滋賀	医療スタッフの確保、特に看護師の確保が難しかった	工夫は行わなかった。参加いただいた人数で対応した。
大阪(くるみ)	・運用予算の問題(企業からの協賛金の減少)	・2025年度から場所を変更(自治体の施設を利用して開催する)
大阪(杉の子)	熱中症や体調不良者を出さないように注意しつつ、満足度の高いプログラム案を作成すること。	室内での活動プログラムの充実に尽力した。野外活動を行う際には、熱中症の危険性を下げるべく、日陰の多い場所および時間帯を選択し、十分な休息や水分摂取を行える環境を整えた。また、スタッフの睡眠時間確保のため夜間のミーティング時間を短縮し、十分な休憩時間が取れる体制を整えた。さらに夜間対応にあたるスタッフは、翌日フリーの立場とし、十分に睡眠をとるよう指示した。スケジュール面・体力面ともにゆとりを持たせつつも、プログラムの完成度・満足度を上げることができるよう、翌年以降も検討していく必要がある。
和歌山	①暑さ・熱中症対策 ②感染症対策 ③キャンパーを増やすにはどうすればよいか。	①野外でのゲーム時や飯盒炊飯時にミストを使用し、冷を採りやすくした。屋外の活動は夕刻の斜陽後に実施し、休憩を小刻みにとった。 ②感染対策担当看護師を配置し、こまめな消毒および手洗い励行・体調不良者の早期発見に努めた。また、他のスタッフからの連絡を同看護師に集約し、シフト配置した医師との連絡を密にとれるようにした。 ③・1型糖尿病患者を診察している医療施設への連絡を継続する。また、その広報についても継続依頼する。 ・キャンパーを送り出してくれた医師にはキャンプの状況を伝え、参加したことが良かったことを知ってもらう。 ・参加費を安くすることも重要。そのための支援を増やしていくことが必要。また、キャンパーだけでなく、スタッフの学生等にも支援できればと思う。
兵庫	事務的な引き継ぎの整理など	
岡山	インスリンポンプを使用している患児大半をしめていたので、インスリン注射を持参している患児が少なかった。キャンプファイヤーをしているとき、インスリンポンプが閉塞してしまったが、交換セットを持参していなかった。高血糖アラームが続き患児も不安になった。	患者会から、インスリン注射を持参していたので、それを使用することができた。次年度は、インスリンポンプを使用している患児でも、本人用のインスリン注射を持参し、遠方外出する時も、持参できるような体制づくりをおこなっていきたい。
広島	これまで行っていた施設環境があまりよくなく、今年は施設を変えて初めての場所で行いました。安価な施設、スタッフが交代しやすい施設(交通費なども含む)、海あるいは山などが近くにあり、広い運動場や研修室の数が多いような施設など条件がそろった施設が少ない。	1年前から施設見学に行き、決定後は何度か下見を行ったりしました
島根	学生ボランティアの確保と開催時期の決定(医学系学生のカリキュラムの変更で夏休みが減っていることに加え兼部をしている学生が増えたため西医体がある、キャンパーの夏休みも短くなっており、開催時期の決定に苦慮した)	情報を早めに把握し、開催可能で参加者が最大になるような日程を確保した。

高知	・3年ぶりの開催であること ・南海トラフ巨大地震臨時情報が出されたこと	・毎月スタッフミーティングを行った。 ・非常時の食糧や水、インスリンの持参、避難所の確認
徳島	■主催者が転勤のため準備が大変であった ■コロナ以降家族と一緒に宿泊したスタイルでキャンプを行っていましたが、キャンパーのみを預かることに再チャレンジした 上記2つの理由で1泊2日しか開けなかったのが残念 ■準備に時間をかけることができず、参加スタッフをまとめて集めた説明会ができなかった ■ポンプについての知識をみんなに伝えることができなかった	■短くした分、子供たちが短期間で仲良くでき、やる気を持って参加できるイベントを考えた ■各職種でキャンプの経験がある少数精鋭をあつめて運営した ■ポンプについて何度か看護職だけ集めて説明会をした
愛媛	<サマーキャンプについて> ・今回、南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)のために開催を中止とする判断をしたが、中止の判断を行うことが最も困難であった。また、保護者に対し、中止の連絡がメールだけでは周知できず、電話もなかなかつながらない保護者がいるなど時間を要した。  <ファミリーキャンプについて> ・未就学児や幼いきょうだいの参加があり、ミニレクチャーやポストキャンパーの話などの時間帯に暇を持て余している様子があり、保護者も集中して参加できない様子があった。	・今回のサマーキャンプ中止をきっかけとし、災害時の対応や準備について注意喚起する機会とした。今後は、緊急時に保護者への連絡が円滑に行えるように対策を講じる必要がある。 ・ファミリーキャンプを開催する際は、キッズスペースの確保や託児等も検討する必要がある。
山口	子供達をサポートする学生スタッフの教育。コロナ禍で継承されるべきところがうまく伝わっていない	安全管理については、医療スタッフ、MRさんにお手伝いをいただいて、危険回避をすることを第1に行うこと、通常や裏方として対応する学生さんも全て子供達にマンツーマンでつかせて、少しでも限られた時間で子供達の話しを聞いてあげる時間を作って、問題点の引き出しの参考とした
久留米	コロナ後、以前より参加者が減り、特に中学生や高校生の参加が少なかったため、思春期の子供が同年代で同じ性別の仲間との交流ができなかった。	キャンプのOBや医療者が可能な限り相談に乗った。
佐賀	コロナ禍明けからの直近2年は日帰りキャンプを行っているため、宿泊で得られるメリット(親から離れて仲間と一緒に過ごすなど)を享受できていない。	来年から1泊2日(2泊3日)程度の宿泊型キャンプへの移行を検討したい。
大分	・開催前に南海トラフ地震臨時情報が出たため、開催をどうするか判断が必要であった。 ・猛暑続きで、野外活動のときに熱中症のリスクがあった。	・開催場所である施設に非常電源や避難場所等の事前確認を行った。 ・屋外での活動の際に、休憩を設けたり、熱中症対策ガイドライン等を確認して、地元のボランティアの方にミスト扇風機とスポットクーラーをお借りするなどした。
熊本	暑さ対策と熱中症予防	WBGTを表示できる温度計を用意して、WBGT32℃以上となれば、屋外での活動中止。 ・屋外でのイベントを通常より1時間早く開始するなど、プログラムの見直し ・事前のスタッフ説明会で、熱中症に関する講義を行い、周知を図った。
長崎	・新型コロナウイルスの影響により、参加できるボランティアスタッフの確保が難しかった。	・各方面へ顧問医師等を通じて協力の呼びかけを行った。 ・宿泊は不可能でも、日帰りで数時間なら協力できる人員を探した。
宮崎	①レクリエーションのための場所移動 川や温泉に移動するのにキャンパーが車に分乗するため、それぞれのクルマに医師が同乗するとともに、自動車運転中の事故等の責任問題が気になった。 ②暑さ対策	①レクリエーションのための場所移動 課題は解決できておらず、来年度の課題。マイクロバス、運転手をチャーターするか、レクリエーションの場所を再考します。 ②暑さ対策 キャンパーにペットボトル飲料を常に携行させるとともに活動場所にもお茶を飲む場所を設けた。屋外で活動する時には簡易テントを用いた。
鹿児島	事務局の担当者が交代となり、事業内容について引き継いでおらず開催準備に時間がかかった。 実際に準備をすすめるメンバーが少なく、コアメンバーの負担が大きい。	日時、宿泊場所を決定でき次第、来年からJADEC 鹿児島の小児サマーキャンプ実行委員会として、県内から実行メンバーを募る。
沖縄		次回2025 年に開催するための準備を早めに取り掛かる。
香川	天候や気温に影響されることがあり、キャンパーの体調変化に注意が必要であった。 インスリンの対応に普段慣れていないボランティアスタッフが対応することになるため、数種類あるインスリンペンやポンプの使い方の周知が必要であった。	キャンパーごとに使用しているインスリンペン、ポンプが違うのと、SMBGの血糖測定器やCGMも違うため、キャンパーごとに使用しているインスリン、血糖測定器を表に作成し、名札の裏に入れてもらうように今回はしています。